みちのくだより 宮城

ー街を音楽で埋めつくすー

定禅寺ストリートジャズフェスティバル実行委員会

「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」は仙台で1991年9月第2日曜日に第1回が開かれました。第10回からは土日2日間、今年2002年は第12回(9月7日、8日)になりました。最初は25グループ、9ヶ所のステージで始まりました。今年は約550グループが参加してその演奏者だけで約3400人、ステージは2日間で82ヶ所となりました。そして45万人の人々が観客として参加しています。

「杜の都」仙台のシンボルけやき並木の定禅寺通を中心に勾当台公園市民広場をはじめいくつかの公園、グリーンベルト、ビルの前の公開空地、商店の軒先、駅前のペデストリアンデッキなど日常生活の様々な場所をこの日だけのステージとして演奏が行われます。当日に街を歩けばいたるところで音楽が聞こえてきて、仙台の街が音楽で埋めつくされるという声が観客の方から寄せられています。その演奏はジャズにこだわらない「ストリートジャズ」という私達の造語で表されています。「ストリートジャス」はストリートでジャズを演奏するというせまい意味ではなく、ジャズが新しい音楽としてアメリカのニューオリンズの街角で生まれた時のように自由な精神と表現を受継いで街が楽しくなる音楽、街に溶けこむ音楽を目指しています。ですからジャンルを問わずジャズ、ロック、ブルース、ゴスペル、・・津軽三味線、胡弓、バグパイプまで様々なあらゆる音楽があふれています。

参加している550のグループにはプロもアマチュアもいます。これまでにフランス、オーストラリア、アメリカなど海外からの参加もあり、国内では東北6県はもちろん関東、関西さらに沖縄の石垣島から参加するバンドもあります。親子でつくるファミリーバンドや第1回から連続参加しているバンド、気仙沼の小中学生ジャズバンド「スイングドルフィンズ」、あるいは自作の楽器を演奏するバンドなどなど本当に様々な形で多くの人が演奏しています。ストリート演奏が終わった夜6時半からは市民広場で土曜日はプロの演奏者によるサタデーナイトジャム、日曜日はフィナーレが行われ300人を超えるミュージシャンの大セッションが繰り広げられます。

このフェスティバルに演奏者として参加する市民、観客として楽しむ市民、そして運営している私達実行委員会も市民ボランティアです。高校生から中高年まで幅広い年代の人達約60人が集まっている実行委員会は、1年を通してステージ

として使用する場所の交渉・確保、広告協賛のお願い、マップやポスターの作成など様々な仕事をして、9月当日の成功のために準備をしております。そしてフェスティバル当日にはステージの設営・運営から最後の撤収・ゴミ拾いまで学生のボランティアも加わり約400人の当日ボランティアが参加しています。多くの市民の皆さんの自発的な気持ちで支えられているこのフェスティバルがこのような規模で行われるのはとても素晴らしいことと思います。

誰でも参加できて、誰でも楽しめる「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」が評価されて、昨年は「第８回仙台市都市景観大賞」を、今年は「第24回サントリー地域文化賞」を受賞する事が出来ました。これまでご協力頂いた方々へ感謝するとともにさらに多くの皆さんに楽しんで頂けるようにいっそう充実した「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」にしたいと張切っております。

来年の「定禅寺ストリートジャスフェズティバル」に皆さんの参加をお待ちしております。

ジャズフェスティバルが終わってスタッフ全員集合

みちのくだより 山形

「突風平野　風車よ闘え！」

（株）新東京ジオ・システム
神保　光昭

山形県立川町、国道47号線沿いにNHKの「プロジェクトX」でも紹介された大きな風車が目に付く。これら風車は日本風力発電の草分的存在である。

奥羽山脈から庄内平野に吹き下ろす「清川だし」、日本三大悪風と言われる。4日に一度、風速10m以上の風が吹き、春は早苗を押し流し、秋は稲穂をなぎ倒した。

「風を逆手にとって農業に生かそう」昭和55年、役場の企画課に風プロジェクトが発足。風力発電を行い、そのエネルギーで温室栽培を行い、余った電力を電力会社に売るという日本初の試みが始まった。早速、小型風車を購入。温室で山菜が実り始めた。しかし、間もなく小型風車は「清川だし」に吹き飛ばされた。

その翌年、科学技術庁から風力発電のモデル地区に選ばれた。国から委託された新型風車で、養豚場のヒーターが回った。しかし5年後、新型風車も地吹雪に叩き落とされた。

昭和63年、3度目のチャンスが訪れた。「ふるさと創生一億円」。これを資金に「清川だし」に負けない本格的な風力発電に取り組んだ。しかし、メーカーが出した見積もりは12億円。海外から輸入しようにも前例が無く、国の許可は下りなかった。

しかし企画課の職員は諦めなかった。担当官の前に座り込み、粘り強く交渉を続けた。

そして平成3年、アメリカから巨大風車3基を輸入した。「清川だし」を見事に受け止め、勢いよく回り始めた。

現在デンマーク型の6基を加え、合計9基で年間657万kWhが発電でき町内で消費される約30%に匹敵し、石油削減量に換算すると年間約160万リットル（200リットル ドラム缶8000本）に相当する。イチゴの温室栽培を始め、電力会社への売り上げが年間8千万円に上るとのことである。

参考：http://www.nhk.or.jp/projectx/

みちのくだより 福島

「みちのく」でいいのか

新協地水（株）
谷藤　允彦

1・原発トラブルに見る中央の「みちのく」認識

東京電力福島第一・第二原発のトラブル隠しが大きな社会問題となっている。東京電力が、原発に発生した数多くのトラブルを長期間隠し続け、監督する立場の原子力保安院がその事実を見逃していたと言うのだ。発覚した直接のきっかけはアメリカ人技術者の内部告発であるが、告発を受けた原子力保安院は、告発者を要注意人物として東京電力に伝達しただけでなく、2年以上も放置していたという。アメリカ人であったから告発が可能で、地元住民を中心とする原発監視

活動活発に行われていたからこの事実が公表されることになったものである。内部告発がなかったとしたら、トラブルが隠されたまま原発が稼働を続け、重大事故に遭う危険が極限まで増大していたのではないかと考えると、背筋の凍る思いがする。

佐藤福島県知事は、ずっと原発に協力的立場をとり続けてきたのであるが、東京電力・原子力保安院のずさんで無責任な対応に堪忍袋の緒が切れて、プルサーマル承認の撤回、徹底した安全監視体制の実行を求める態度を明確にした。

東京電力・原子力保安院は、原発は絶対安全が確保されているとして、安全上重大なトラブル以外は公表しなくても良い、という「維持基準」を設けて運転再開を急ごうとしているようである。

中央官庁や大企業の意識の中には、危険なもの、厄介なものは「みちのく」に押しつけ、その果実だけを享受するが、押しつけられる「みちのく」の痛みは絶対に理解しないという思考回路が組み込まれているのではないか。これに対しては、「それだけ安全なものなら霞ヶ関に移設しろ」という声が出ている。けだし同感と言わなければならない。

2・「みちのく」を甘受するのか

原発問題だけでなく、青森県の核燃料サイクル基地も、青森・岩手県境や東北各地に多量に投棄されている産業廃棄物も、厄介者は「みちのく」にという思想で押しつけられたものではないか。

東北最大規模のリゾート開発ともてはやされたアルツ磐梯が1000億円近い負債を抱えて行き詰まった。リゾート法に基づきバブルに踊った中央大資本主導で建設されたリゾート地は、現在多くが行き詰まり、中央資本が手を引くと共に破綻を余儀なくされている。同様の破綻は各地の工業団地と誘致企業に広がって、東北は倒産と失業の波に飲み込まれようとしている。

各自治体はその後始末に追われ、そのことが東北地方の不況を一層深刻なものにし、我々地質調査業界不振の大きな要因になっていることは明らかだ。

なぜこのような押しつけがまかり通っているのか、私には、「みちのく」という言葉を我々がそのまま受け入れてきたところに心理的な要因があるように思えてならない。

「みちのく」は、道の奥－即ち行き止まりの意味であり、不便なところ、人目に付かないところのイメージである。この言葉は大和朝廷以来の中央権力が東北地方を指した蔑称である。坂上田村麻呂から戊辰戦争まで、度重なる中央権力からの痛いお仕置きを受けて、東北人はこの言葉を受け入れさせられてきた。「みちのく」はゴミ捨て場、という思いを中央が抱き、このことに対する強い抗議が行われないことが、今日の問題を生みだしているのではないだろうか。

3・東北人としての高い志が21世紀を切り開く

地質調査業は、公共投資依存型の事業分野として成長してきたが、今や事情は全く異なってきた。公共事業依存の受け身体質では、建設産業氷河期の中で凍えてしまう運命です。

21世紀は、環境・防災・安全・健康・長寿・快適等の事業分野にこそ新たな発展の可能性が開かれている。業界内の足の引っ張り合い的な競争ではなく、異業種・他分野との競争に打ち勝ってこの新分野を地質調査業の守備範囲に取り込むことができるかどうかが問われているのである。

縄文時代、東北は原日本人が形成された場所であり、日本の近代化に当たっては、人材・食料・原材料・エネルギーの供給基地であった。東北はまさに日本人のふるさとと言うべき土地です。

我々東北地方の地質調査会社にとっては、「みちのく」という蔑称を甘受するのではなく、日本のふるさととしての誇りを持って、東北に適した生き方を提案し技術開発をすすめ、東北人としてのアイデンティティーを確立する志を持つことが、21世紀に生き抜き発展する条件であると確信する。